子どもの生活と学びに関する親子調査 2021

ダイジェスト版

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて … p2
調査概要 … p3
基本属性 … p4

1　学校生活の変化 … p5
① 学校生活への意識
② 学校の授業の様子
③ 学校でのデジタル機器の使用
④ 学校配布のデジタル機器の家庭での使用
⑤ 学校に対する意見

2　家庭の変化 … p10
① 教育への考え、教育費
② 社会に対する意識
③ 保護者の教育意識－Ⅰ
④ 保護者の教育意識－Ⅱ
⑤ 親子のかかわり

3　子どもの生活・学びの変化 … p15
① 生活時間
② メディアの使用
③ 子どもの体験
④ 学習への姿勢
⑤ 将来の進学・就職希望

ISS 東京大学社会科学研究所　ベネッセ教育総合研究所

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。
本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環として行った調査結果を載せています。

■研究プロジェクトの特徴

1. 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

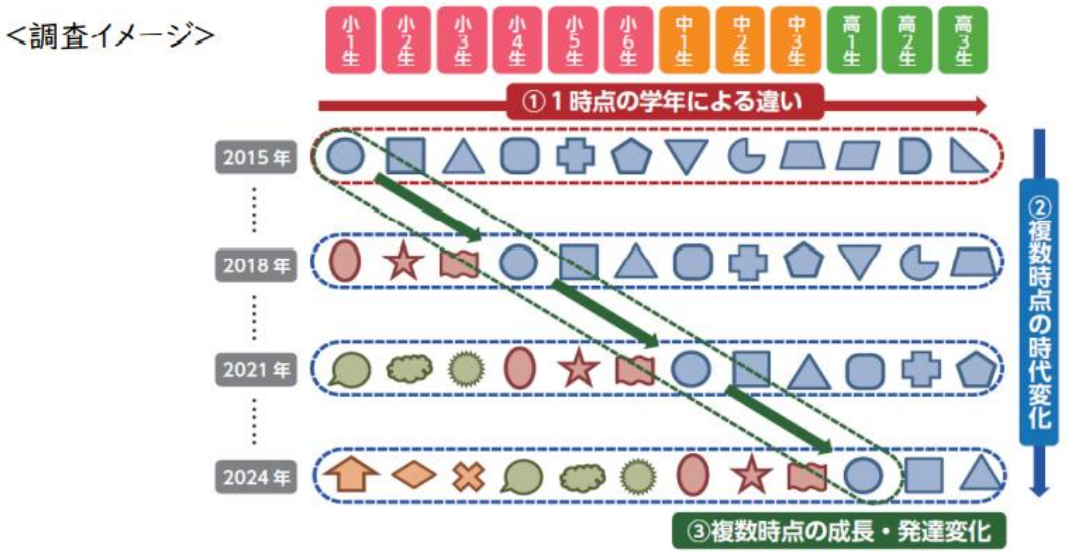
研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施します。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます（図中①）。また、経年比較により、子どもと保護者の「時代変化」をみることができます（図中②）。

2. 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査します。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、親子の「成長・発達」の様子や因果関係を明らかにすることができます（図中③）。

3. 子どもの生活と学びにかかわる意識や実態を、幅広く詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広く尋ねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などを尋ねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。



※ 研究プロジェクトの詳細は、最後のページのWebサイトよりご覧ください。

［本ダイジェスト版について］

・図表で使用している百分率（%）は、小数第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

調査概要

調査テーマ

子どもの生活と学習に関する意識と実態（子ども）
保護者の子育て・教育に関する意識と実態（保護者）

調査時期

2021年7～9月

調査方法

郵送による自記式質問紙調査
Web調査（一部対象者のみ）

調査対象

全国の小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者　※小学1～3年生は保護者が回答。

発送数・回収数

学年	最終発送数	保護者票		子ども票	
		有効回収数	有効回収率	有効回収数	有効回収率
小1～3生【郵送】	5,829	5,093	87.4%		
小4～6生	5,704	4,520	79.2%	4,502	78.9%
【郵送】	5,135	4,115	80.1%	4,111	80.1%
【Web】	569	405	71.2%	391	68.7%
中学生	4,812	3,499	72.7%	3,480	72.3%
【郵送】	4,331	3,178	73.4%	3,177	73.4%
【Web】	481	321	66.7%	303	63.0%
高校生【郵送】	4,126	2,710	65.7%	2,709	65.7%
小1～高3生合計	20,471	15,822	77.3%		
小4～高3生合計	14,642	10,729	73.3%	10,691	73.0%

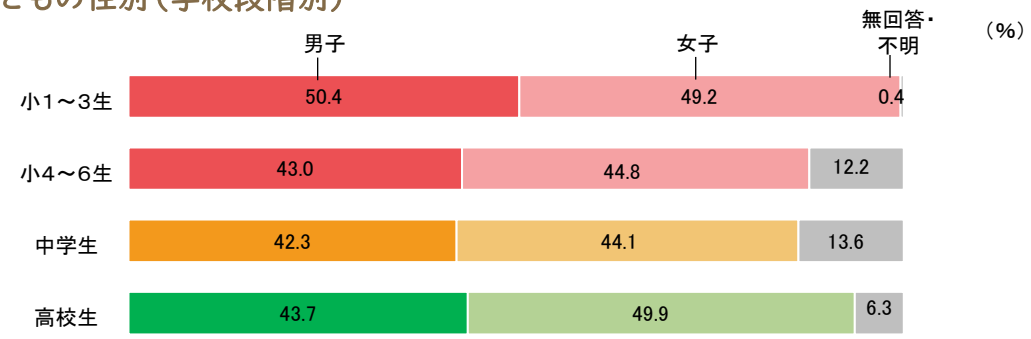
分析サンプル

	小1～3生	小4～6生	中学生	高校生
2019年	5,175	4,071	3,168	2,892
2020年	5,127	4,407	3,323	2,789
2021年	5,066	4,430	3,433	2,669

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
2019年	1,740	1,732	1,703	1,492	1,379	1,200	1,136	1,032	1,000	967	970	955
2020年	1,884	1,596	1,647	1,563	1,472	1,372	1,155	1,128	1,040	921	916	952
2021年	1,707	1,779	1,580	1,502	1,516	1,412	1,280	1,098	1,055	953	851	865

※ 本分析では、各調査年で回答があったものを対象としている。ただし、①親もしくは子どもの片方回答（小4～高3生）、②学年の回答が親と子で不一致、③調査発送時の学年と回答学年が不一致、④「在学していない」と回答したケースは、分析対象から除外している。

子どもの性別（学校段階別）

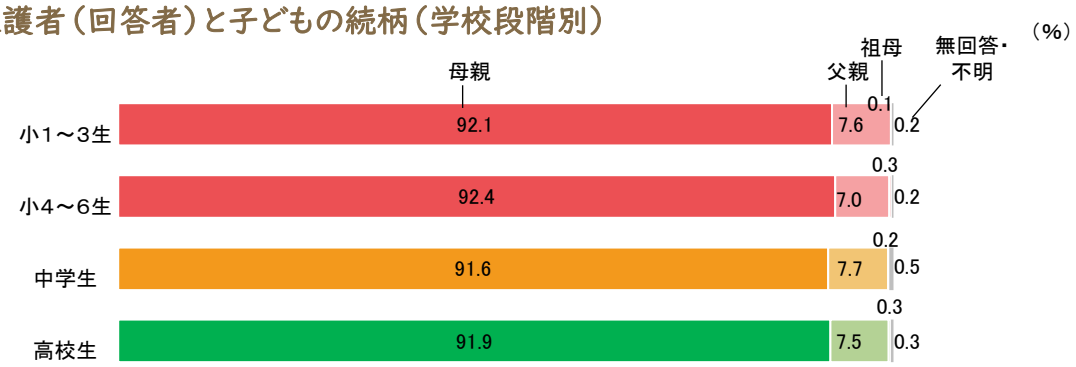


子どもが通っている学校の種類（学校段階別）

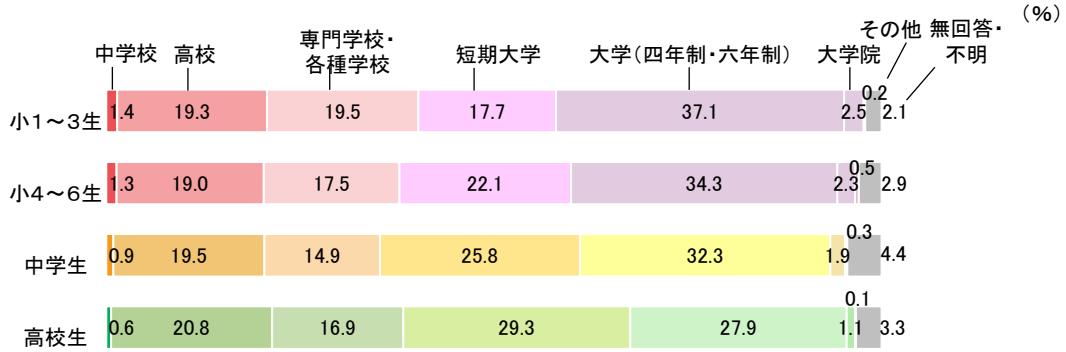
（%）

	公立	公立の中高一貫校（中等教育学校）	国立	私立	その他	無回答・不明
小1～3生	96.8	—	1.0	1.4	0.2	0.6
小4～6生	96.9	—	1.0	1.4	0.2	0.5
中学生	85.6	2.3	1.5	9.6	0.3	0.7
高校生	58.9	2.6	1.8	34.9	0.4	1.5

保護者（回答者）と子どもの続柄（学校段階別）



母親の最終学歴（学校段階別）



① 学校生活への意識

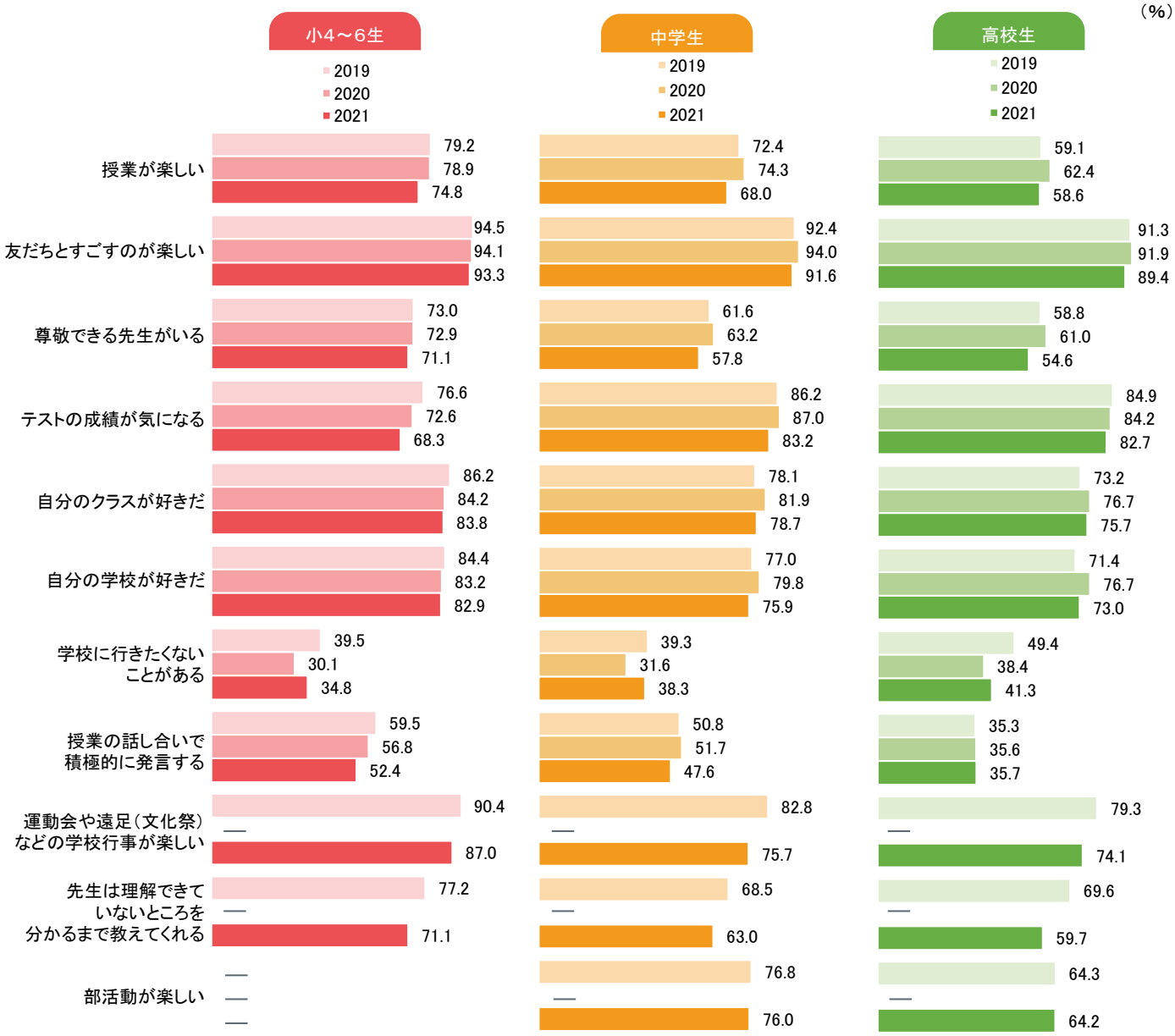
「授業が楽しい」と感じる子どもが、全体的に減少傾向。

学校生活に関して、「友だちとすごすのが楽しい」「自分のクラスが好きだ」と感じる子どもは、2019年～2021年の各年で8～9割を占める。一方、「授業が楽しい」「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」と感じる子どもは、2019年から減少傾向にある。「学校に行きたくないことがある」子どもは2019年から2020年にかけて減少したものの2021年にかけては増加傾向にあり、2020年の減少はコロナによる休校の影響であったことがうかがえる。

Q 学校生活について、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

回答：子ども

図1-1-1 学校生活への意識



※「とてもあてはまる＋まああてはまる」の%。
※「運動会や遠足（文化祭）などの学校行事が楽しい」は2020年の調査では尋ねていない。
※「部活動が楽しい」は小4～6生および2020年の調査では尋ねていない。
※「先生は理解できていないところを分かるまで教えてくれる」は2020年の調査では尋ねていない。

2021年は小・中学校の授業で、パソコン・タブレットの使用が大幅に増加。

2021年は小・中学校で「パソコンやタブレットを使う」授業が大幅に増加し、8割を超えた。小・中学校での使用率が高校を上回り、GIGAスクール構想による1人1台端末配備の影響がうかがえる。調べ学習や観察・実験・調査などのアクティブ・ラーニング型の授業は2019年に比べ2020年は減少したが、2021年にかけては回復。「自分の学習のやり方やプロセスをふりかえる」授業は、この3年間、全学校段階で増加傾向がみられるなど、新学習指導要領に沿った指導が浸透しているようだ。

Q　この1年くらいの間に、学校の授業で、次のようなことはどれくらいありましたか。

回答：子ども

図1-2-1　学校の授業

※「よくあった＋ときどきあった」の%。

③ 学校でのデジタル機器の使用

ほとんどの小・中学生が学校でデジタル機器を活用している。

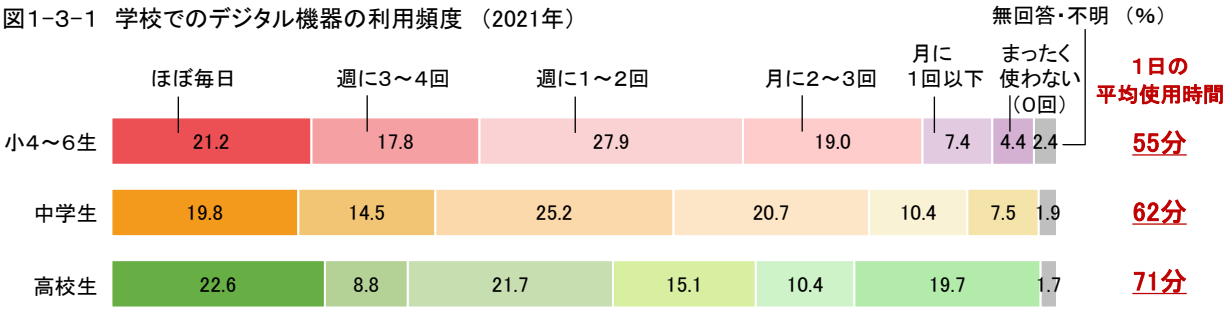
いずれの学校段階でも約2割の子どもが、ほぼ毎日、学校でデジタル機器を使用している。「まったく使わない」割合は高校生が約2割と最も高く、中学生以下は1割に満たない。一方、1日の平均使用時間は高校生が71分と最も長く、利用状況が小・中学生よりも多様であるようだ。また、紙での学習と比較すると、「学習意欲が高まる」「内容がわかりやすい」「自分の学習方法に合っている」といった点で、特に小4～6生がデジタルでの学習にメリットを感じている。

Q 学校ではデジタル機器をどれくらい使っていますか。

Q 学校ではデジタル機器を1日にどれくらいの時間使っていますか。

回答：子ども

図1-3-1 学校でのデジタル機器の利用頻度 （2021年）



※使用時間は、学校でデジタル機器の使用が「ほぼ毎日」～「月に1回以下」と回答した人のみに尋ねた。
※平均使用時間は、「30分」を「30分」、「1時間」を「60分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「270分」などと置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。

Q 学校ではデジタル機器を使って、次のようなことをどれくらいしていますか。

Q デジタル機器を使った学習は、紙での学習に比べて、どのように感じますか。

回答：子ども

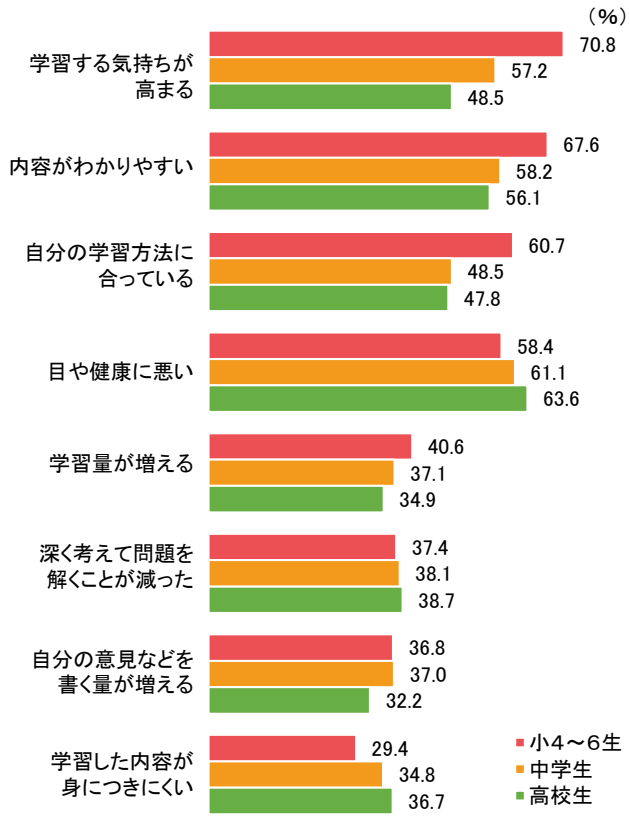
表1-3-1 学校でのデジタル機器の利用用途 （2021年）

（%）

	小4～6生		中学生		高校生	
インターネットで学習内容を調べる（調べ学習）	82.6	①	84.6	①	75.3	①
動画を見て学ぶ	57.4	②	50.3		49.7	③
計算や漢字などの問題を解く	49.7	③	34.1		22.6	
友だちと意見を共有する	49.1		53.6	②	41.2	
発表用の資料をまとめる	47.4		52.8	③	51.4	②
デジタルの教科書や資料集を使う	40.0		41.2		38.5	
授業以外で使う（委員会活動・部活動など）	21.4		23.5		29.9	
テストを受ける	18.1		22.1		27.3	
友だちや遠くの人と交流する	13.5		16.0		18.9	

※「よくする＋ときどきする」の%。
※学校でデジタル機器の使用が「ほぼ毎日」～「月に1回以下」と回答した人のみに尋ねた。
※項目は小4～6生の数値の降順に示す。
※①～③はそれぞれの学校段階の中で上位3つまでを示す。

図1-3-2 デジタルと紙の学習効果・影響比較 （2021年）



※「とても+まあそう思う」の%。
※項目は小4～6生の数値の降順に示す。

④ 学校配布のデジタル機器の家庭での使用

小・中学生の約4割がデジタル機器を家庭に持ち帰る。高校生の活用は多様。

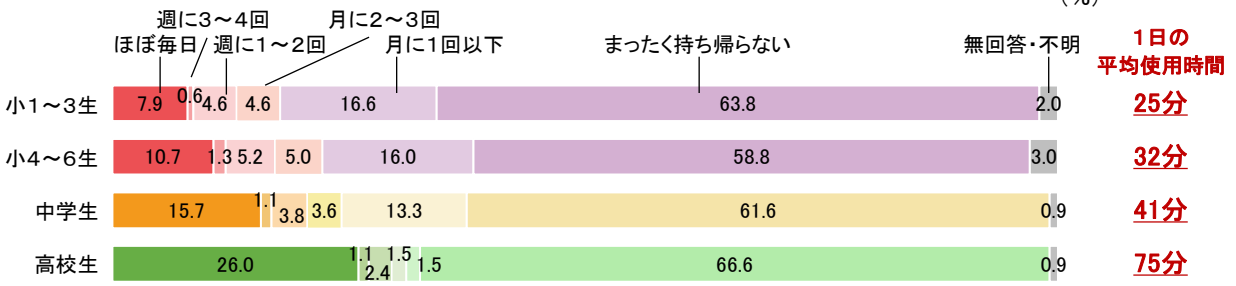
学校配布のデジタル機器を「月に1回」より多く家庭に持ち帰っている割合は、小・中学生で約4割、高校生は約3割である。持ち帰っている生徒のうち高校生では「ほぼ毎日」使っている割合が高く、1日の平均使用時間も小・中学生より長い。どの学校段階でもインターネットでの調べ学習を行う割合が高く、小・中学生はドリル学習や発表用資料のまとめでの活用も多い。高校生は映像授業の視聴やレポート作成など、より多様な学習で活用している。

Q 学校で使用するあなた専用のデジタル機器を、どれくらいの頻度で家に持ち帰っていますか。

Q 家では、あなた専用のデジタル機器を1日にどれくらいの時間使っていますか。

小4生～：回答：子ども
小1～3生：回答：保護者

図1-4-1 学校デジタル機器の持ち帰り頻度 （2021年）

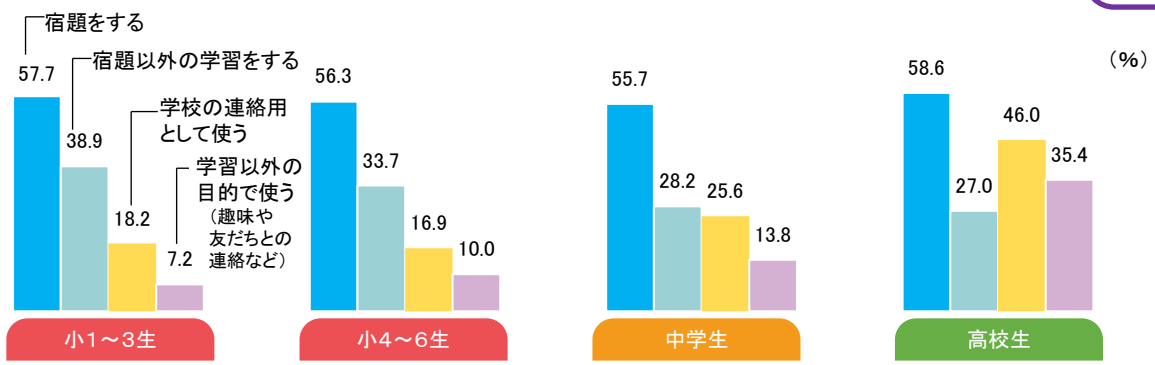


※使用時間は、持ち帰りが「ほぼ毎日」～「月に1回以下」と回答した人のみに尋ねた。
※平均使用時間は、「30分」を「30分」、「1時間」を「60分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「270分」などと置き換えて、「まったく持ち帰らない」「無回答・不明」を除外した上で算出。
※保護者には「あなた専用」を「お子様専用」にして尋ねた

Q 家では、あなた専用のデジタル機器をどのように使っていますか。（複数回答）

小4生～：回答：子ども
小1～3生：回答：保護者

図1-4-2 学校デジタル機器の家庭での使用目的 （2021年）



※持ち帰りが「月に1回以下」～「ほぼ毎日」と回答した人のみに尋ねた。 ※保護者には「あなた専用」を「お子様専用」にして尋ねた

表1-4-1 学校デジタル機器の家庭での学習内容 （2021年） （%）

回答：子ども

	小4～6生		中学生		高校生	
計算や漢字などの問題を解く	62.9	①	49.5	②	41.3	
インターネットで学習内容を調べる（調べ学習）	56.7	②	73.3	①	78.4	①
発表用の資料をまとめる	31.5	③	48.1	③	54.7	
動画で映像授業を見る	29.8		33.7		58.9	②
デジタルの教科書や資料集を使う	22.4		34.4		45.5	
レポートを作成する	22.1		47.3		57.5	③
友だちと意見を共有する	20.0		25.8		35.4	
単語や用語を暗記する	13.1		30.5		40.8	

※「よくする＋ときどきする」の%。
※項目は小4～6生の数値の降順に示す。
※持ち帰りが「ほぼ毎日」～「月に1回以下」と回答した人のみに尋ねた。
※①～③はそれぞれの学校段階の中で上位3つまでを示す。

⑤ 学校に対する意見

「学校は子どもの学力を伸ばしてくれる」と考える保護者は、2019年から2020年にかけて減少したが、2021年は回復。

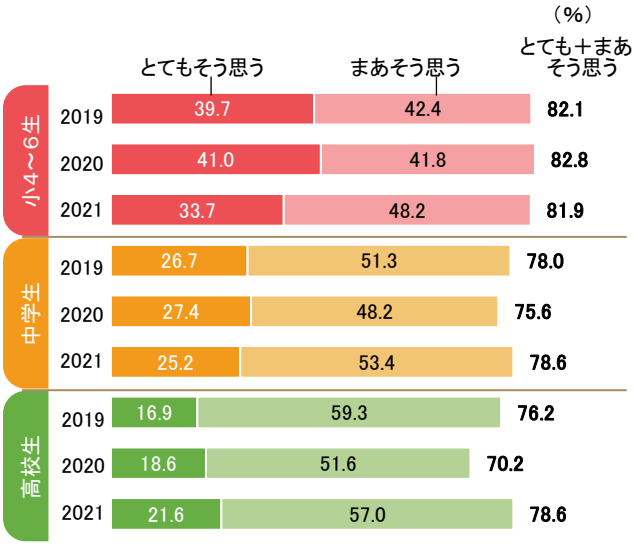
学校に関する意見として、「学校は学力を伸ばしてくれる」と回答した割合（「とても」＋「まああてはまる」）は、ほとんどの学校段階において子どもも保護者も8割前後である。特に、2021年の小4～6生の子ども（81.9%）と小1～3生の保護者（83.3%）の肯定率が他よりも高い。経年で見ると2019年から2020年にかけて減少したが、2021年にかけては増加に転じてしている。これらの傾向は、「学校は社会のマナーやルールについて教えてくれる」についてもほぼ同様である。

Q あなたは、次のことについてどう思いますか。

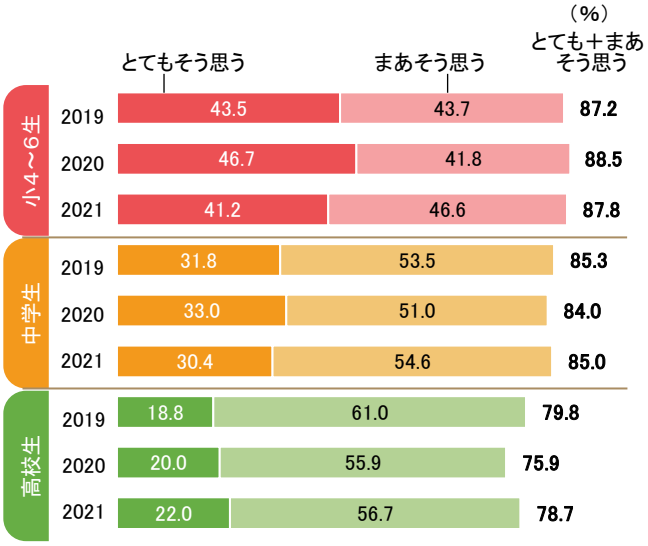
回答：子ども

図1-5-1 学校に対する意見（子ども）

学校は自分の学力を伸ばしてくれる



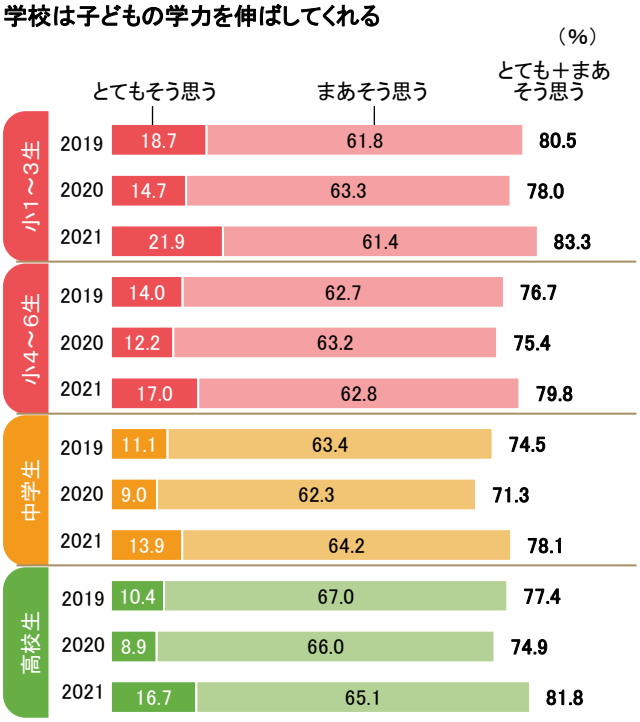
学校は社会のマナーやルールについて教えてくれる



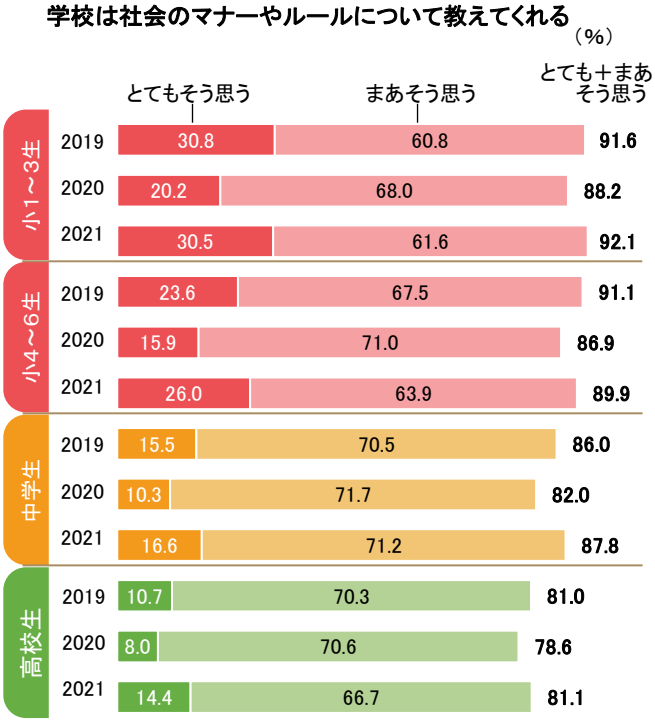
回答：保護者

図1-5-2 学校に対する意見（保護者）

学校は子どもの学力を伸ばしてくれる



学校は社会のマナーやルールについて教えてくれる



ひと月あたりの平均教育費は、2019年→2020年は減少したものの、2021年は増加傾向。

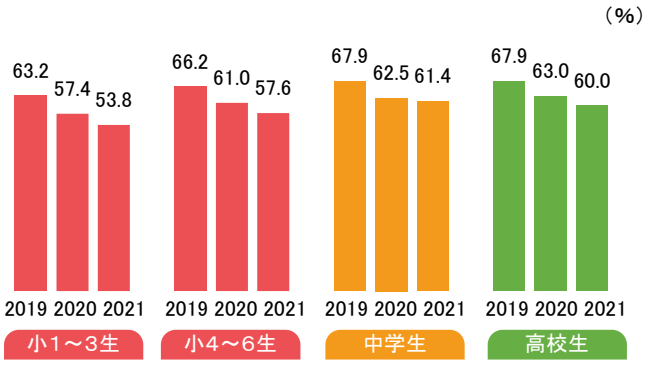
ここ3年間で「多少無理をしても子どもの教育にはお金をかけたい」と考える保護者の割合は変わらないが、「できるだけいい大学に入れるように成績を上げてほしい」と考える保護者は減少傾向にある。子ども1人、ひと月あたりの平均教育費は、2019年から2020年にかけて減少したが、2021年は2019年以上の水準に回復した。最も教育費が高いのは中学生で、子ども一人、ひと月あたり約18,000円である。子どもが複数いる家庭では、子ども全員のひと月あたりの平均金額は、中学生で約40,000円である。

Q 調査の対象となっているお子様の教育について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

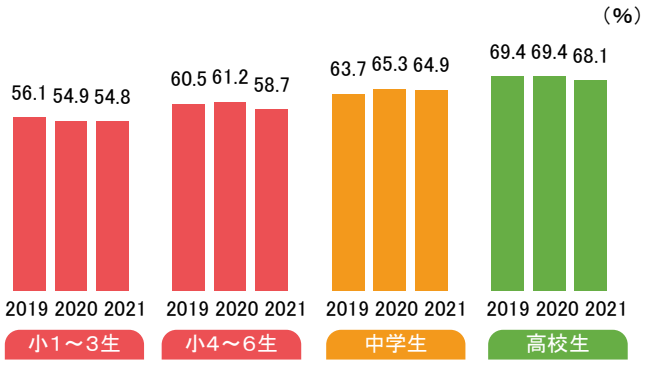
回答：保護者

図2-1-1 教育への考え（保護者）

できるだけいい大学に入れるように成績を上げてほしい



多少無理をしても子どもの教育にはお金をかけたい



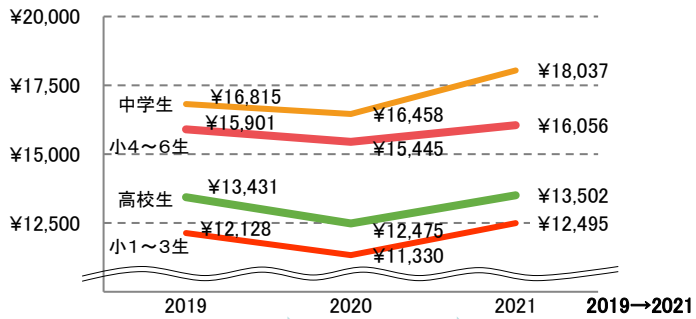
※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

Q ご家庭の教育費はどれくらいですか（習い事や学習塾の費用、教材費などの合計。学校の授業料は除きます）。

回答：保護者

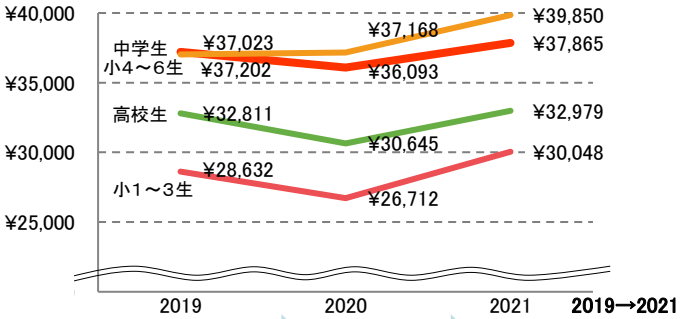
図表2-1-1 ひと月あたりの平均教育費

子どもひとりの金額の月平均（円）



	2019		2020		2021	2019→2021
小1～3生	¥12,128	(¥798)	¥11,330	¥1,165	¥12,495	¥367
小4～6生	¥15,901	(¥456)	¥15,445	¥611	¥16,056	¥155
中学生	¥16,815	(¥357)	¥16,458	¥1,579	¥18,037	¥1,222
高校生	¥13,431	(¥956)	¥12,475	¥1,027	¥13,502	¥71

子ども全員の合計金額の月平均（円）



	2019		2020		2021	2019→2021
小1～3生	¥28,632	(¥1,920)	¥26,712	¥3,336	¥30,048	¥1,416
小4～6生	¥37,202	(¥1,109)	¥36,093	¥1,772	¥37,865	¥663
中学生	¥37,023	¥145	¥37,168	¥2,682	¥39,850	¥2,827
高校生	¥32,811	(¥2,166)	¥30,645	¥2,334	¥32,979	¥169

※平均教育費は「1,000 円未満」を 500 円、「5,000 円～ 10,000 円未満」を 7,500 円、「50,000 円以上」を 52,500 円のように置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。

日本の将来への不安が、特に子どもで2019年より増加。

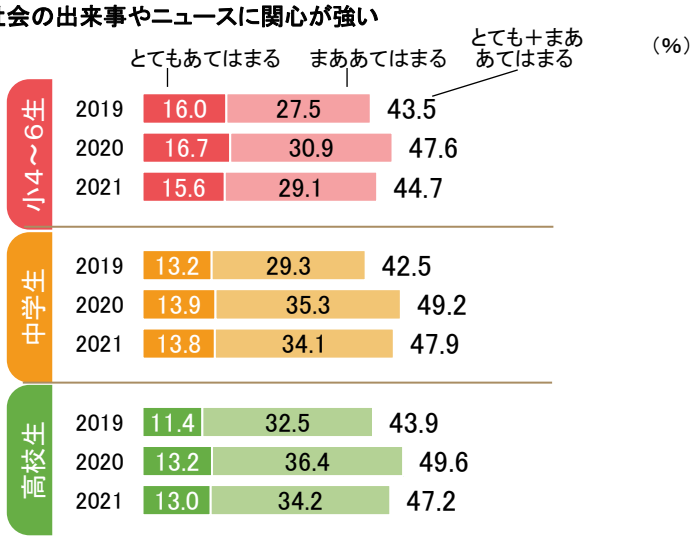
「社会の出来事やニュースに関心が強い」子どもの割合（※）は、2021年は中学生47.9%、高校生47.2%で、2019年と比較してやや増加している。また、「これからの『日本』がどうなるか不安だ」に回答した割合（※）は、2021年保護者で約9割、子どもで約6割である。2019年と比べると、特に子どもで増加幅が大きい。（※「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」）

Q　あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

図2-2-1　社会の出来事やニュースへの関心（子ども）

社会の出来事やニュースに関心が強い

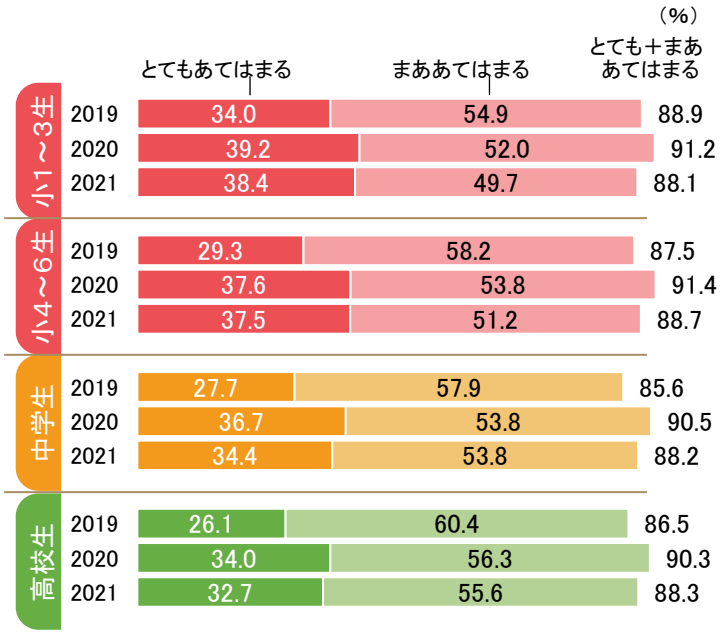
回答：子ども



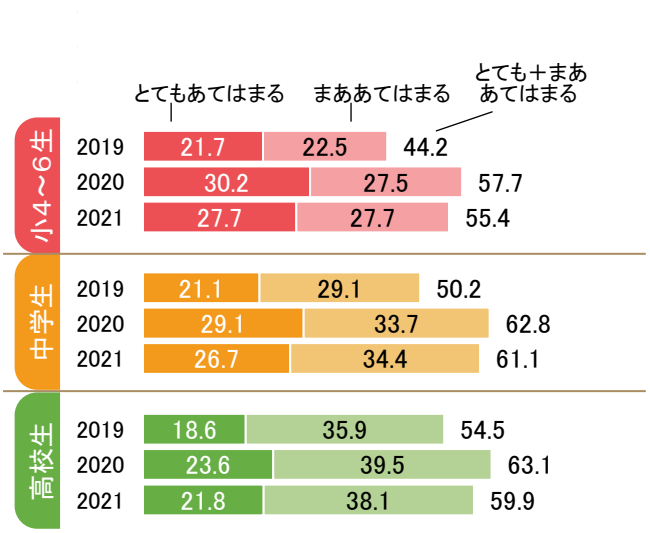
Q　今後の社会について、あなたの考えをお聞きします。

図2-2-2　今後の社会についての考え（保護者・子ども）

これからの「日本」がどうなるか不安だ　回答：保護者



これからの「日本」がどうなるか不安だ　回答：子ども



※子どもには、「あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」と尋ねた。

③ 保護者の教育意識 －Ⅰ

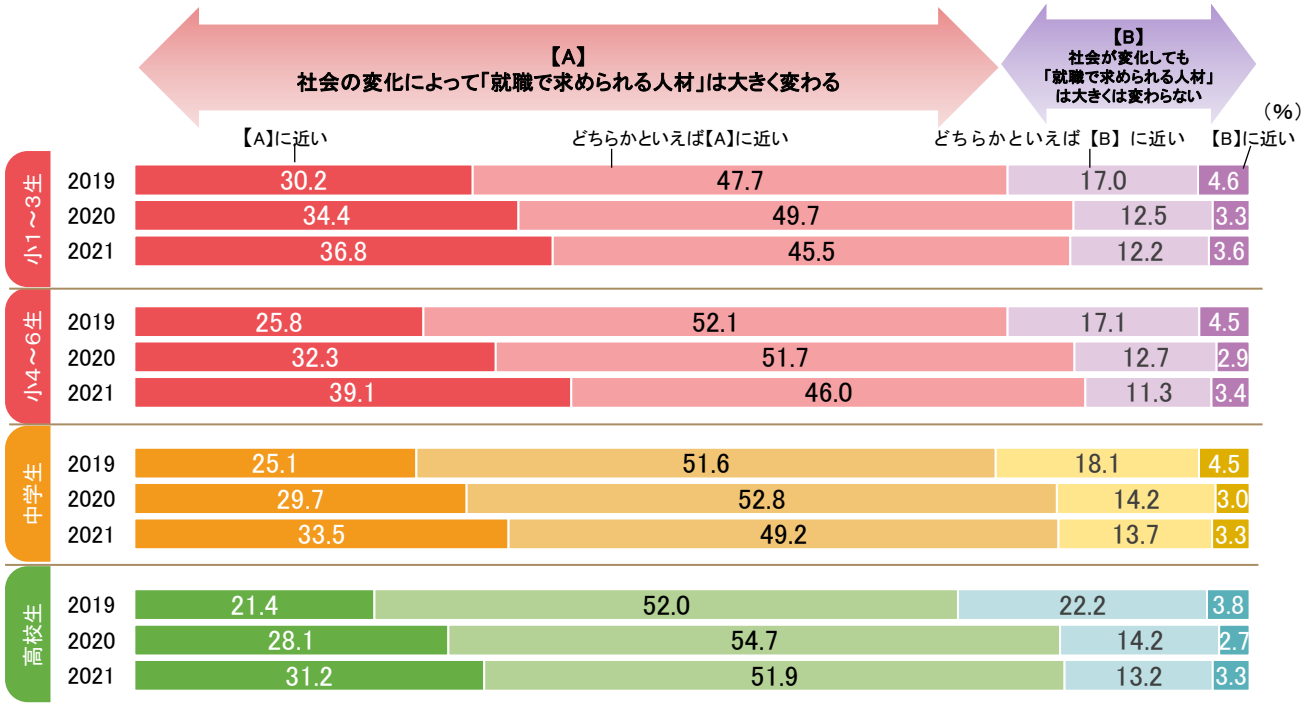
「社会の変化によって『就職で求められる人材』は大きく変わる」と考える保護者が増加傾向。

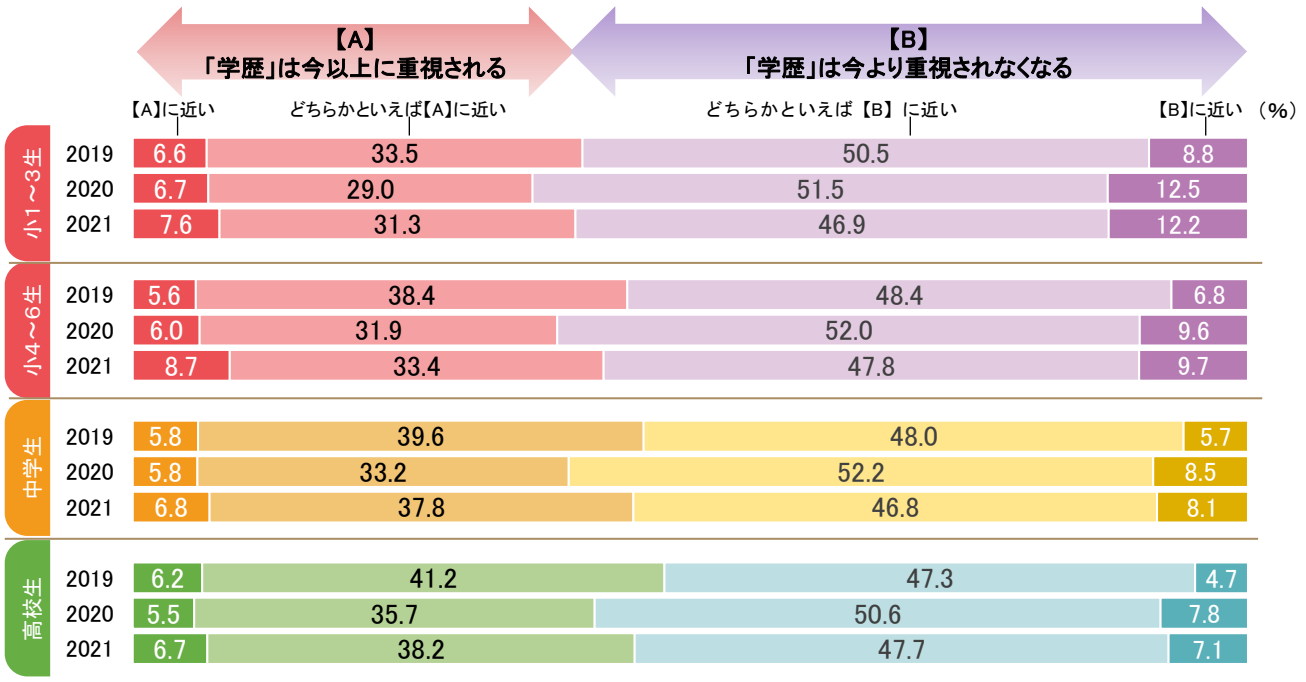
いずれの学校段階でも「社会の変化によって『就職で求められる人材』は大きく変わる」と考える保護者は約8割で、2019年から2020年にかけて増加したまま2021年も変わらない結果となった。また、「『学歴』は今より重視されなくなる」と考える保護者は、2019年から2020年にかけ増加したが、2021年は再び2019年の水準に戻り約5～6割程度である。

Q 今後の社会について、あなたの考えをお聞きします。AとBの2つの意見のうち、あなたの考えに近いのはどちらですか。

回答：保護者

図2-3-1 今後の社会についての考え（保護者）





※「無回答・不明」を提示していないため、数値の和は100%にはならない。

④ 保護者の教育意識 －Ⅱ

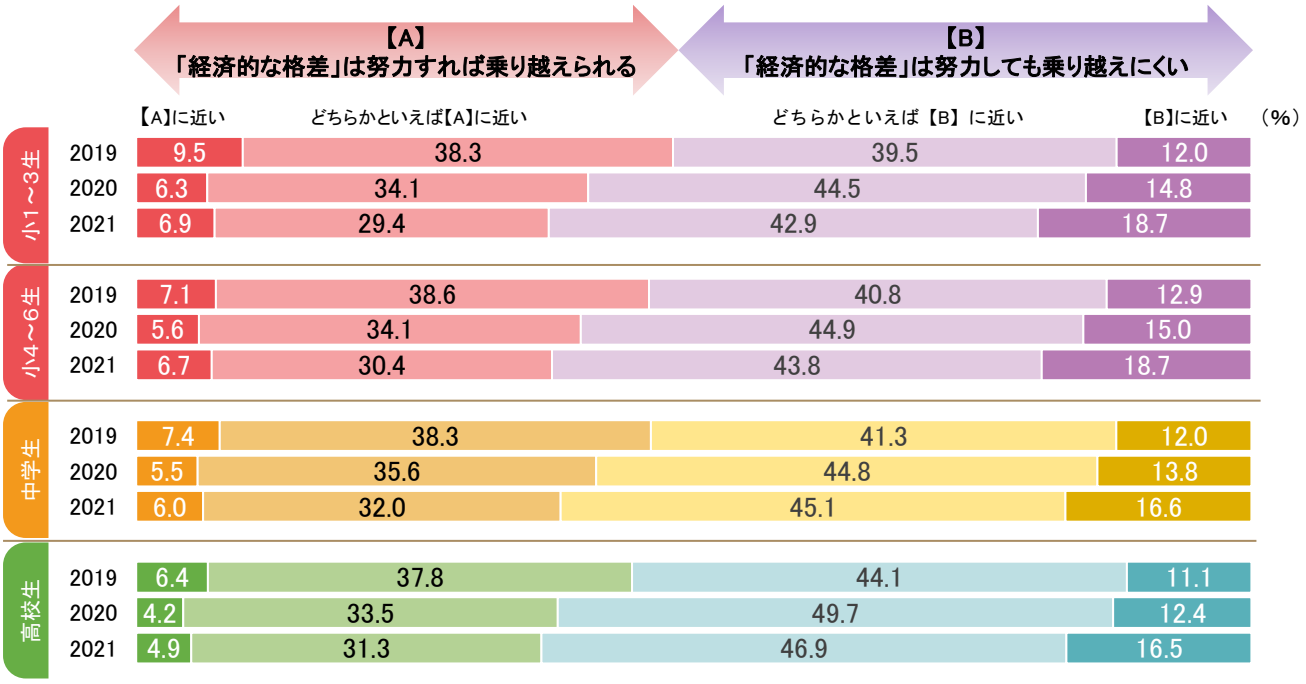
「『経済的な格差』は努力しても乗り越えにくい」と考える保護者が増加。

2021年の結果をみると、いずれの学校段階でも「『経済的な格差』は努力しても乗り越えにくい」と考える保護者は約6割で、2019年と比べ10ポイント前後増加した。また、「新型コロナの影響で学習や体験が不足しないか心配だ」に「とても+まああてはまる」と回答した保護者の割合は2020年より減少したが、依然として半数を超える。

Q 今後の社会について、あなたの考えをお聞きします。AとBの2つの意見のうち、あなたの考えに近いのはどちらですか。

図2-4-1 今後の社会についての考え（保護者）

回答：保護者

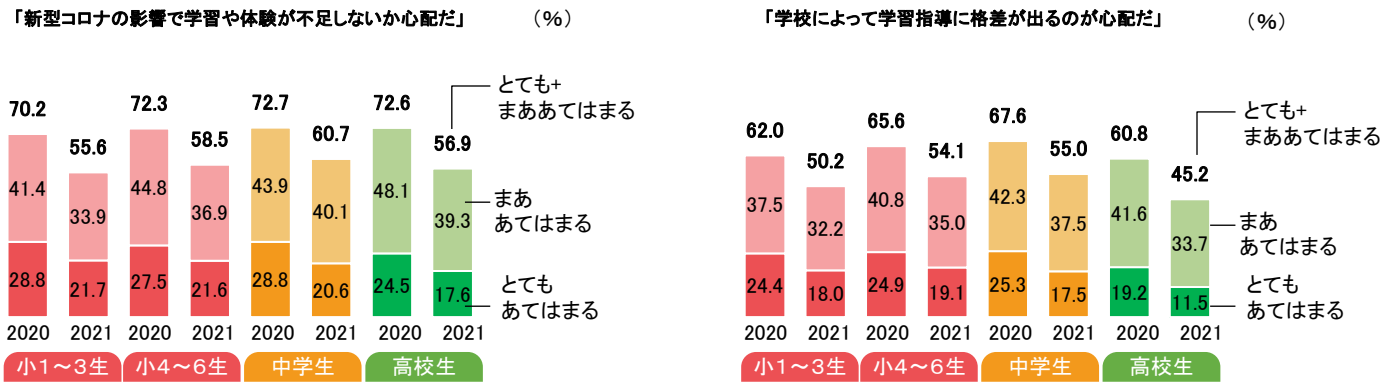


※「無回答・不明」を提示していないため、数値の和は100%にはならない。

Q 調査の対象となっているお子様の教育について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図2-4-2 教育についての考え（保護者）

回答：保護者



⑤ 親子のかかわり

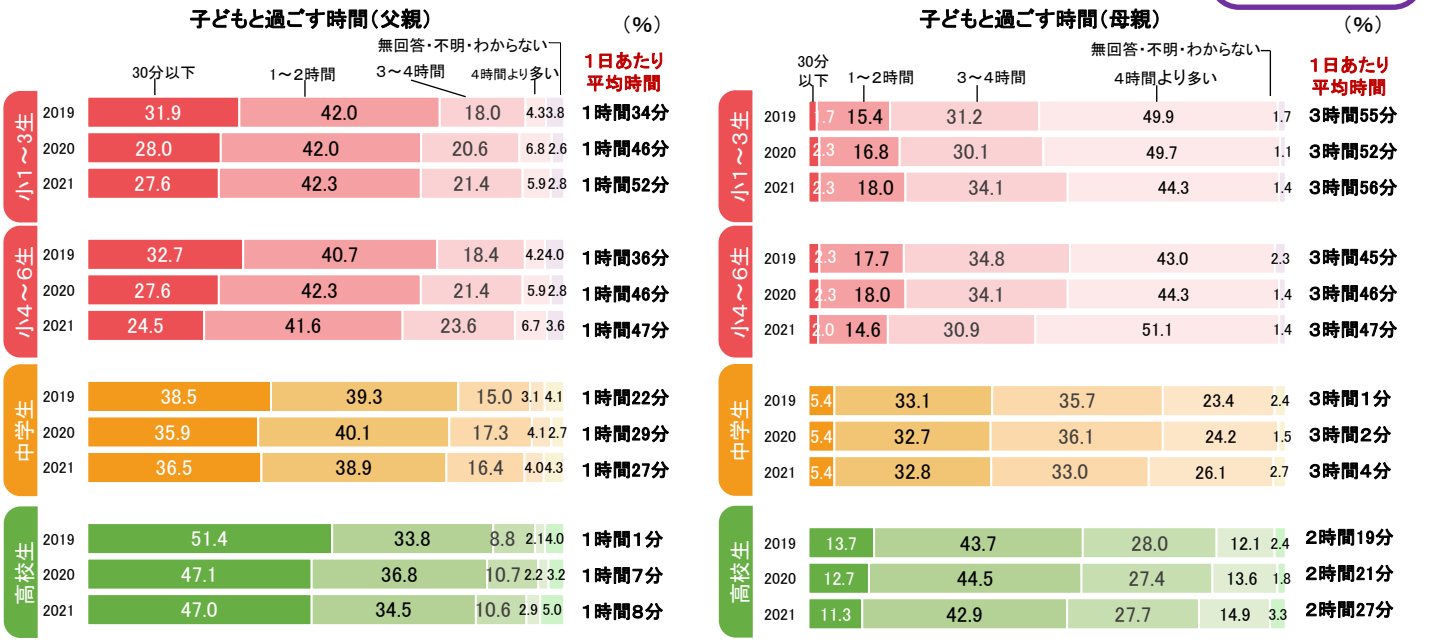
親子で過ごす時間は微増しているにもかかわらず、小4生以上では親子の会話が減少。

親子で過ごす時間は、父親、母親共に2019年から2021年にかけて微増傾向にあるが、小4生以上では親子で会話をする頻度は減少している。特に小4～6生と中学生で「勉強や成績のこと」、「将来や進路のこと」について父親、母親と会話する頻度が減少している。また、いずれの学校段階でも、父親と過ごす時間（ふだん、1日あたりの平均）は1～2時間程度で、母親と過ごす時間（約2時間半～4時間）の半分程度である。

Q ふだん、調査の対象となっているお子様と一緒にすごしたり、話したりする時間は、1日にどれくらいですか。睡眠時間は除きます。

図2-5-1 親子で過ごす時間

回答：保護者

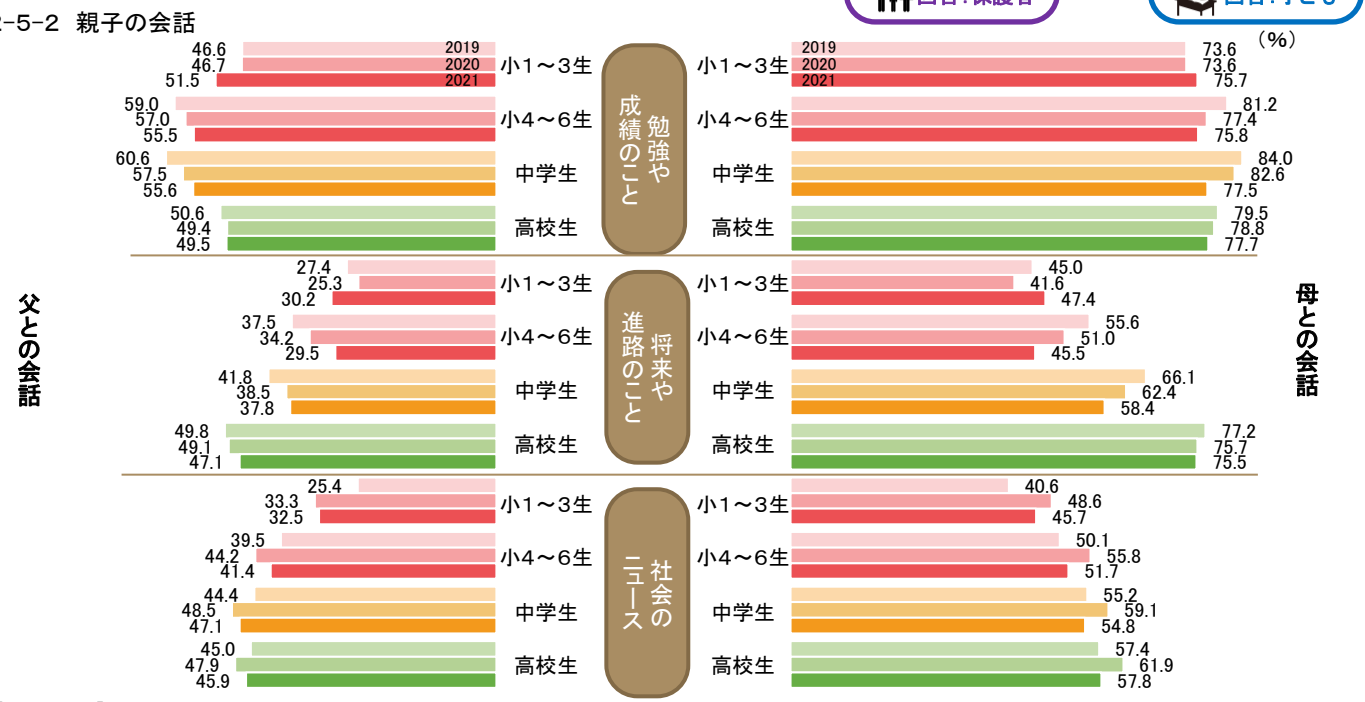


※「30分以下」は「ほとんどない」＋「30分以下」の%、「1～2時間」は「1時間」＋「2時間」の%、「3～4時間」は「3時間」＋「4時間」の%、「無回答・不明・わからない」は「無回答」＋「不明」＋「わからない」の%。
※平均時間は、「30分以下」を「15分」、「1時間」を「60分」、「4時時間より多い」を「270分」などと置き換えて、「無回答・不明・わからない」を除外した上で算出。

Q ふだん、お父さんやお母さんと、次のことについてどれくらい話をしますか。

小1～3生：回答：保護者　小4生～：回答：子ども

図2-5-2 親子の会話



※「よく話す」＋「ときどき話す」の%。
※保護者には「調査の対象となっているお子様はふだん、調査の対象となっているお子様のお父さんやお母さんと、次のことについてどれくらい話をしますか。」と尋ねた。

ゲームやスマートフォンの使用時間は増加傾向が続く。

子どものメディア使用時間、家族で過ごす時間、一人で過ごす時間が、2019年から全体的に増加している。特に、2019年から2021年にかけて、ゲーム、スマートフォン、パソコン・タブレット使用時間の伸びが大きい。1日あたりのメディア使用時間のうちもっとも長いのは、小4～6生が「テレビやDVD」（88分）、中・高生が「携帯電話やスマートフォン」（中学生82分、高校生135分）である。読書時間と運動時間にはほとんど変化が見られない。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。

回答：子ども

表3-1-1 生活時間（分）

		小4～6生					中学生					高校生				
		2019	2020	2021	差（2020－2019）	差（2021－2019）	2019	2020	2021	差（2020－2019）	差（2021－2019）	2019	2020	2021	差（2020－2019）	差（2021－2019）
メディア	テレビやDVDを見る	89	88	88	(1)	(1)	78	75	72	(3)	(6)	59	54	53	(5)	(6)
	テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ	53	65	66	12	13	52	60	63	8	11	47	49	49	2	2
	携帯電話やスマートフォンを使う	23	27	30	4	7	66	74	82	8	16	120	127	135	7	15
	パソコンやタブレット(iPadなど)を使う	24	29	31	5	7	29	33	36	4	7	23	29	33	6	10
	音楽を聴く	14	16	17	2	3	35	38	39	3	4	59	57	55	(2)	(4)
読書	本を読む	21	22	21	1	0	17	17	17	0	0	13	12	11	(1)	(2)
	マンガや雑誌を読む	15	18	18	3	3	13	14	15	1	2	12	11	11	(1)	(1)
	新聞を読む	2	2	2	0	0	2	2	2	0	0	2	2	2	0	0
運動・遊び	運動やスポーツをする(習い事、部活動を除く)	29	29	30	0	1	20	19	20	(1)	0	12	13	13	1	1
	友だちと遊ぶ・すごす	76	72	70	(4)	(6)	54	49	49	(5)	(5)	55	54	55	(1)	0
	家族とすごす	237	245	242	8	5	190	192	195	2	5	132	140	147	8	15
	自分1人ですごす	44	43	48	(1)	4	81	89	93	8	12	120	126	131	6	11
学習	学校の宿題をする	44	41	41	(3)	(3)	50	51	51	1	1	50	54	50	4	0
	学校の宿題以外の勉強をする(学習塾の時間を除く)	29	29	30	0	1	35	38	38	3	3	46	48	49	2	3

※平均時間は、「しない」を「0分」、「4時間」を「240分」、「4時間以上」を「300分」などと置き換えて、「無回答・不明」を除外した上で算出。
※差がプラス5分以上の場合は赤色の背景色、マイナス5分以上の場合は紫色の背景色で示した。
※小数点第一位を四捨五入して示しているため、差の値が「0」と「(0)」の2通りある。

自分専用のスマートフォンを所有する中高生が増加。

ゲーム、携帯・スマートフォンの使用時間をみてみよう。小4生～中学生のゲームの1日あたりの平均使用時間は、2019年と比べ2020年、2021年で大きく増加している。携帯・スマートフォンの1日あたりの平均使用時間は、学校段階が上がるにつれて増加し、高校生になると2時間を超える。タブレット、スマートフォンの所有状況をみると、自分専用のものを使う比率が増加している。P15の結果と合わせて、子どものメディア使用については特に注視していく必要がありそうだ。

Q あなたはふだん（学校がある日）、次のことを、1日にどれくらいの時間やっていますか。

回答：子ども

図3-2-1 ゲームの使用時間（学年別）

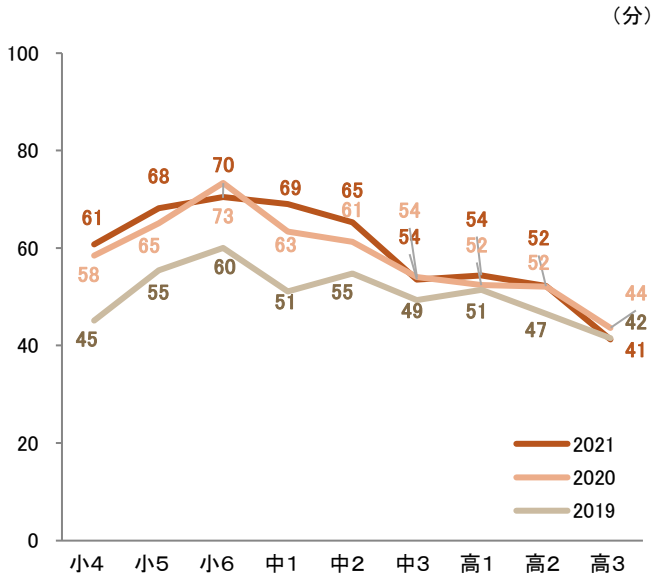
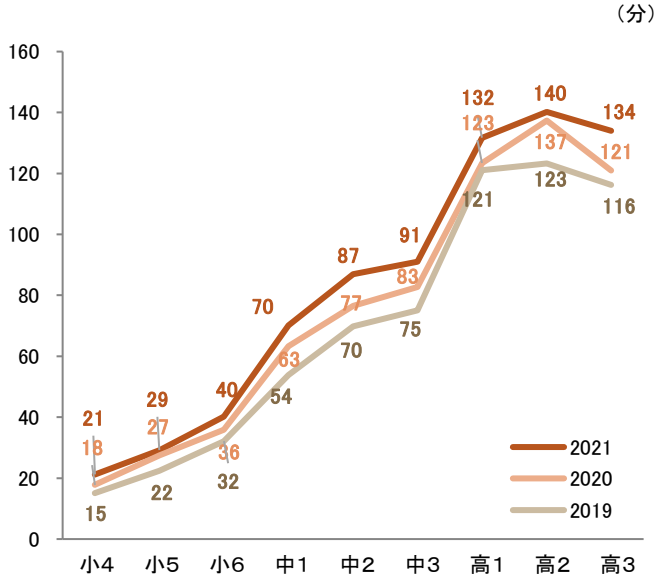


図3-2-2 携帯・スマートフォンの使用時間（学年別）



Q あなたは、つぎのようなデジタル機器を、家で使っていますか。

回答：子ども

図3-2-3 タブレットの所有・使用状況

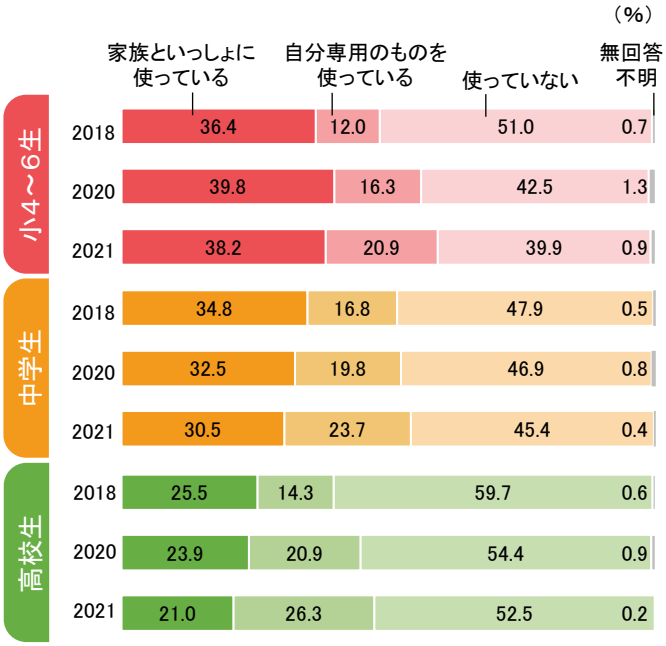
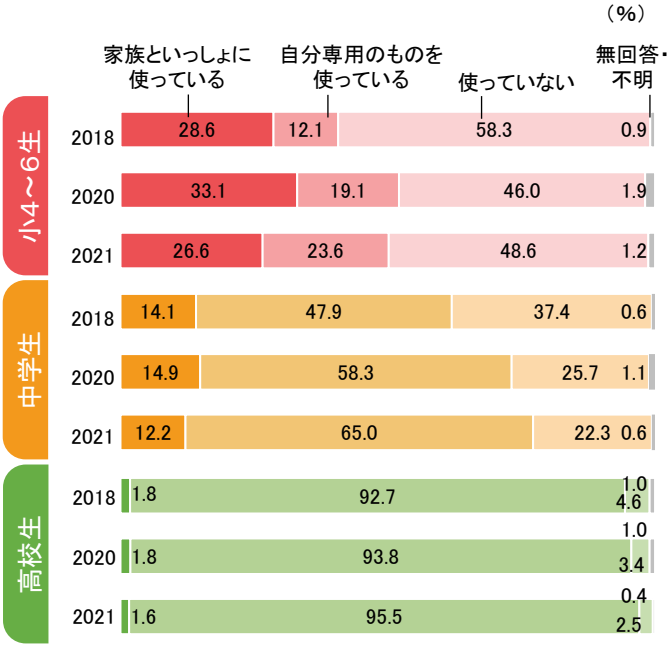


図3-2-4 スマートフォンの所有・使用状況



旅行やスポーツ観戦、地域の行事など、子どもの体験が減少。

2019年と比較して、子どもの体験を示す項目のほとんどが減少している。減少幅が最も大きいのは「地域の行事に参加する」で、小4～6生は2019年に約8割が経験していたが、2021年は約3割にとどまった。全体的に遠方への外出や人が集まる場所での体験活動の減少幅が大きく、2019年調査後に発生した新型コロナウイルスの感染拡大による影響の大きさがうかがえる。一方、自分の進路を深く考えたりや疑問点を自分で深く調べる活動は増加している。

Q この1年くらいの間に、あなたは次のようなことを経験しましたか。(複数回答)

回答:子ども

図3-3-1 子どもの体験

(%)

	小4～6生			中学生			高校生		
	2019	2021	差 (2021-2019)	2019	2021	差 (2021-2019)	2019	2021	差 (2021-2019)
家族で旅行をする	78.5	49.1	(29.4)	68.4	37.5	(30.9)	53.7	25.1	(28.6)
外国に行く	9.3	1.2	(8.1)	9.2	1.1	(8.1)	14.4	0.6	(13.8)
自然の中で思いっきり遊ぶ	59.3	54.5	(4.8)	38.8	35.7	(3.1)	26.8	23.9	(2.9)
美術館や博物館に行く	40.7	22.9	(17.8)	28.6	15.9	(12.7)	22.5	11.5	(11.0)
家で季節の行事をする(クリスマスや節分など)	83.7	81.2	(2.5)	75.0	71.6	(3.4)	61.6	60.5	(1.1)
スポーツ観戦に行く	31.8	13.6	(18.2)	30.2	12.8	(17.4)	27.9	11.6	(16.3)
地域の行事に参加する(夏祭りなど)	80.3	29.5	(50.8)	62.4	14.6	(47.8)	38.4	6.8	(31.6)
ボランティア活動に参加する	17.4	8.4	(9.0)	20.2	10.8	(9.4)	19.3	9.3	(10.0)
小さい子どもの世話をする(近所の子どもも含む)	47.6	40.9	(6.7)	33.3	24.4	(8.9)	25.6	16.2	(9.4)
お年寄りの世話をする(手伝いや介護など)	18.1	10.8	(7.3)	14.0	10.0	(4.0)	13.7	8.0	(5.7)
親から仕事の楽しさや大変さを聞く	45.5	39.6	(5.9)	34.8	34.4	(0.4)	32.8	33.7	0.9
自分の進路(将来)について深く考える	27.7	24.6	(3.1)	39.6	42.8	3.2	63.1	68.2	5.1
疑問に思ったことを自分で深く調べる	23.5	28.8	5.3	21.9	30.4	8.5	23.9	33.8	9.9
無理だと思うようなことに挑戦する	33.5	26.7	(6.8)	22.6	22.0	(0.6)	17.4	17.1	(0.3)

※差がプラス5ポイント以上の場合は赤色の背景色、マイナス5ポイント以上の場合は紫色の背景色で示した。

「勉強しようという気持ちがわかない」子どもが増加傾向。

「勉強しようという気持ちがわかない」に「とても+まああてはあまる」と回答した子どもの割合は、すべての学校段階において2019年から2021年にかけて増加傾向にある。2021年の結果を学年別にみると、小6生（41.1%）から中1生（55.9%）の間で14.8ポイントも増加している。「人に言われなくても自分から勉強する」に「とても+まああてはあまる」と回答した子どもの割合は、2019年と比較すると小・中学生において特に減少がみられる。

Q あなたは自身のことについて、次のことはどれくらいあてはまりますか。

回答：子ども

図3-4-1 勉強しようという気持ちがわかない（学校段階別）

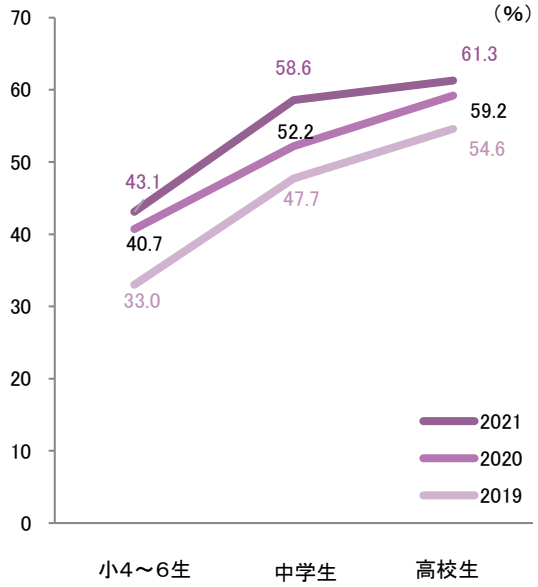


図3-4-2 勉強しようという気持ちがわかない（学年別）

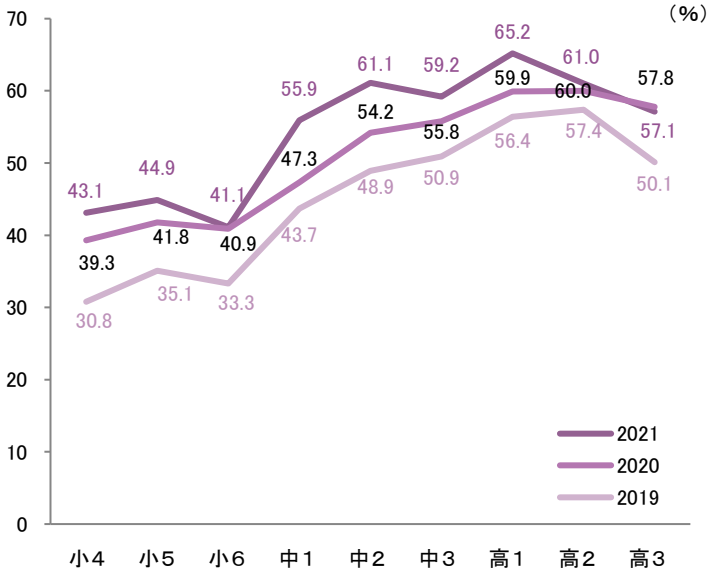


図3-4-3 人に言われなくても自分から勉強する（学校段階別）

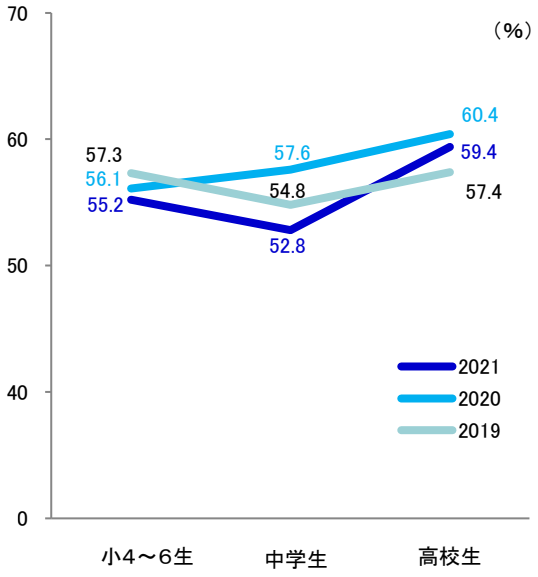
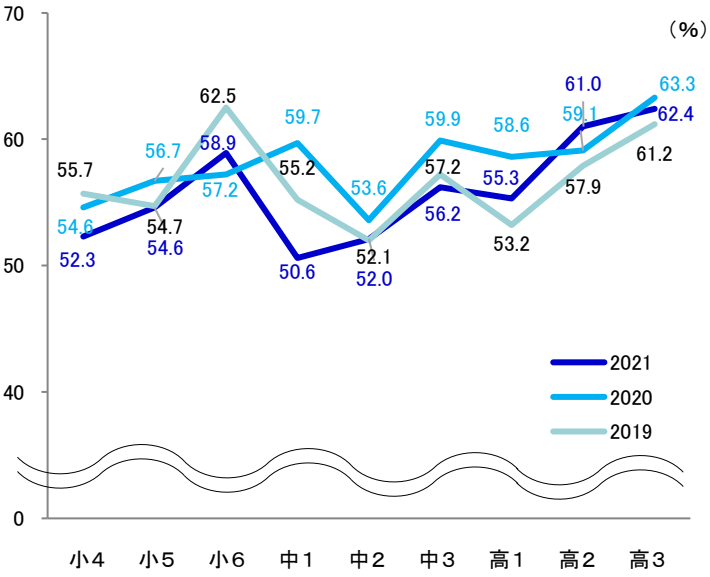


図3-4-4 人に言われなくても自分から勉強する（学年別）



※図3-4-1～4共通 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

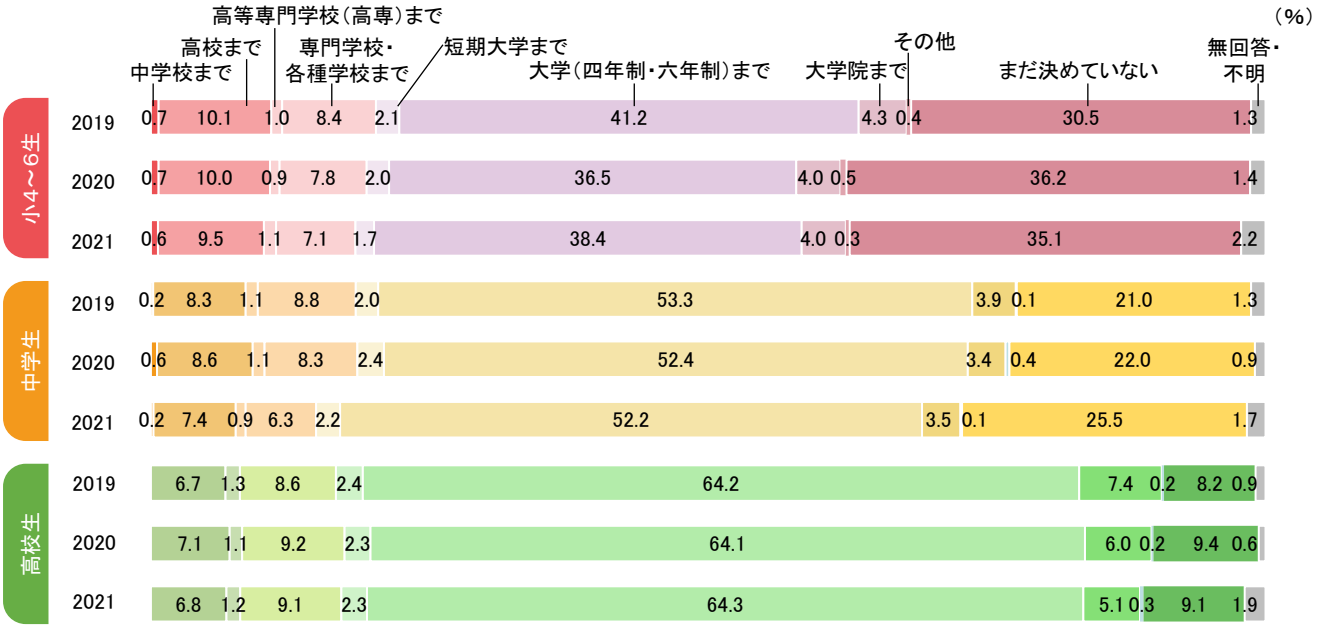
将来の進学希望を「まだ決めていない」小・中学生が増加。

希望する最終学校段階を尋ねたところ、すべての教育段階において「大学まで」が最も多い結果となった。一方で、小・中学生が「まだ決めていない」と回答した割合を見ると、2019年から2021年にかけて増加している。また、小・中学生では、勉強する理由として「希望する（高校や）大学に進みたいから」と回答した割合も、2019年から2021年にかけて減少傾向にある。

Q あなたは、将来、どの学校まで進みたいと思いますか。

回答：子ども

図3-5-1 将来の進学希望



Q あなたが勉強する理由について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

Q あなたには、将来なりたい職業（やりたい仕事）はありますか。

回答：子ども

図3-5-2 勉強する理由

「自分の希望する（高校や）大学に進みたいから」

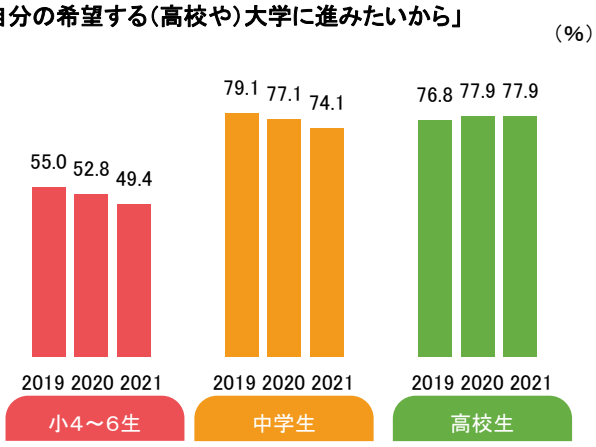
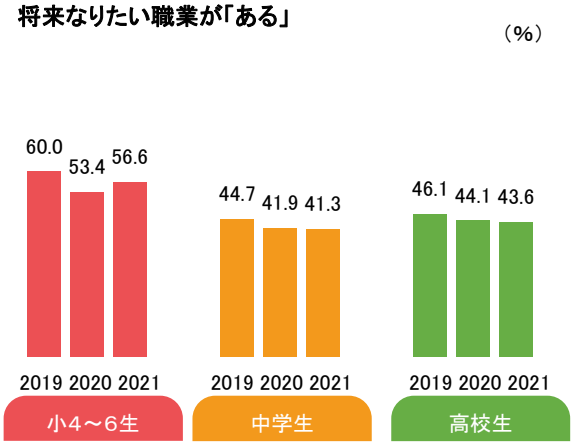


図3-5-3 将来の就職希望

将来なりたい職業が「ある」



※「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の%。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所
共同研究「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

佐藤 香（東京大学社会科学研究所 教授）／ 谷山 和成（ベネッセ教育総合研究所 所長）

プロジェクトメンバー

耳塚 寛明（青山学院大学 特任教授）
秋田 喜代美（学習院大学 教授）
松下 佳代（京都大学 教授）
石田 浩（東京大学社会科学研究所 特別教授）
藤原 翔（東京大学社会科学研究所 准教授）
大﨑 裕子（立教大学 特任准教授）
木村 治生（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）
高岡 純子（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員）
岡部 悟志（ベネッセ教育総合研究所 主任研究員）
朝永 昌孝（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
野﨑 友花（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
松本 留奈（ベネッセ教育総合研究所 研究員）
渡邉 未央（ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ）

※調査票検討・調査基盤の持続性ワーキンググループメンバー
須藤康介（明星大学 准教授）
小野田亮介（山梨大学大学院 准教授）
山口泰史（帝京大学高等教育開発センター 助教）

※所属・肩書きは、2022年4月時のものです。

研究プロジェクト Webサイトのご案内

ベネッセ教育総合研究所
https://berd.benesse.jp/

東京大学社会科学研究所
http://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/

「子どもの生活と学びに関する親子調査2021」ダイジェスト版

発行日 2022年4月20日
発行人 谷山 和成
編集人 小林 一木
発行所 ㈱ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
編集協力 神田 有希子

0HNB03
©Benesse Educational Research and Development Institute
無断転載を禁じます。